

白い雲

2018年 新春 64号

ご挨拶

「神威岬」 PHOTO BY RIKU ITO

新しい年の願い

皆さま、新年にあたって何を願っていらっしゃいますか。

私は、まず弁護士としては当然のことではありますが、依頼者に対して、常に質の高い法的サービスを提供して参りたいと考えています。そのために、事務所の創設以来の歴史と未来に責任を負う弁護士として、私と共に働く若い弁護士の法律事務に対しても十分指導し、将来にわたって質の高い法律事務が提供できるよう努力したいと考えています。

また弁護士会や、弁護士政治連盟、その他の公益的な団体の職務についても引き続き尽力して参ります。

趣味の宝塚は、新しい年も、同好の皆さんとますます広く深く絆を強めて活動して参ります。昨年末、星組の「ベルリン、わが愛」という作品を観ました。舞台は第二次大戦前のドイツ、無声映画からトーキーへと移り変わる中で、活動する映画人たち。そこへ忍び寄る、プロパガンダとして映画を利用しようとするナチスの黒い影。映画を愛し、大衆の文化としての映画を守ろうとする映画人たちの戦い。作品は、そこで終わりますが、実際のドイツにはその先の歴史があります。この作品の中でナチスへの協力者として登場する映画人「レニ・リーフェンシュタール」、この実在する人物が、ナチスの国威発揚映画、ベルリンオリンピックの「民族の祭典」等を作るところへと繋がって行くのです。

新しい年、第二次大戦後の我が国の70年の平和的な文化の自由な伝統が、ナチスドイツと軌を一にした戦前の日本に戻ることはないよう、私たち主権者国民が、深く、そして賢く考える年にしなければならないと思います。

CONTENTS

- 1面 ご挨拶
- 2面 裁判員裁判劇「汝、公正たれ」
- 3面 宝塚歌劇愛好会2年間のあゆみ
- 4面 2017記憶に残る作品／むら遠征記
- 5面 活動日誌／シゲニーの推薦図書(3)
- 6面 事務所の歴史(1)



2018年1月 弁護士 伊藤 茂昭

観客が裁判員として一緒に考える 裁判員裁判劇「汝、公正たれ」



[a]



[b]

【a】

殺人罪の証人尋問「ゲネプロの一コマ」
本番は、傍聴席にも観客が並ぶ

【b】

証人尋問 小料理屋のおかみ
事務所の女優「岡本弘実さん」

舞台は出演者の発信する表現が観客を感動させ盛り上がる。一方観客席のノリや涙が発信され、その相互交流が出演者の演技を一層迫真のものに駆り立ててゆく。このように感動的な舞台は観客席とステージが一体化して生まれて行くものである。

ところで、今回ご紹介するのは、観客が舞台上の裁判劇の裁判員として評議を行うという最初から観客が出演者と一体となって参加するという舞台である。まず舞台と言っても100人程度の小劇場なので、高いステージと区切られた観客席があるわけではない。いわば一つのホールの奥をステージとしてその一番奥に裁判官がおり、一般の法廷と同じように、バーがあり、傍聴席から観る舞台は正面に裁判官、左側に検察官席、右側に弁護側席がある。検察官と弁護士が裁判官の方を向いて弁論するのは同じである。違うのは裁判官をぐるりと取り囲むように舞台上にテーブルが8つほど配置され、観客はそのテーブルに座り裁判官と同じ方向から訴訟手続きを見る。実際の法廷では一般の有権者から選ばれた6人の裁判員が裁判官の左右に並ぶが、この法廷は舞台上狭しというように70～80人の裁判員が並んでいるのである。

裁判は、被告人が入廷し、裁判長が観客に対し刑事裁判の無罪の推定の原則などを説明したのち、起訴状朗読から法廷劇として始まる。

観客は7～8人ずつのグループに分かれ裁判員として法廷を見つめる。

私が観劇した日の法廷は、殺人罪の成否。DVにあっている妻が夫を包丁で刺し、殺したという検察側の主張。これに対し、DVの結果、精神疾患により、自殺をしようとしたところ、夫が止めようとしてもみ合いになり、包丁が刺さり死亡してしまった、という弁護側主張。殺人か、傷害致死か、過失致死か、無罪か、証拠調べ前に裁判官役が各テーブルで観客の裁判員と評議により争点を整理する。証人に聞きたい内容を裁判官役が代わって尋問する。そして、判決前の評議。実際の法律の定めにしたがって、通常過半数によるが、過半数以上の意見がなく分かれた

ときは、最も重い刑罰を選択した人数から、次に重い刑罰を選択した人数を加えていき、その人数が全体の過半数に達したときの刑の量定を、その判決の内容とする。各テーブルで議論して出た結論を一人の裁判員の意見として、テーブルの数の裁判員がいると想定し、もう一度評決を行う。そしてそれを元に判決が言い渡される。

評議の結果による何種類かの判決が事前に準備されている。検察官、弁護士、被告人にはそのそれぞれに対応した脚本が準備されている。

見終わって、プロの目から見てもなかなかよくできた裁判劇であり、刑事裁判を身近に感じてもらうためにも、多くの方に観てほしいと思った作品である。

私のテーブルでは、法学部の学生と思われる裁判員たちが積極的に議論を戦わせていた。私は身分を明かさず、黙って聞いていた。それにしても、同じ演技を観ているにもかかわらず、有罪無罪も刑の量定も思った以上に意見の差が大きい。

さて、私がこのような観客参加型裁判員劇を観るきっかけは、事務所の小林弘実(芸名 岡本弘実)さんが、役者としてオーディションを受け、「まごころ18番勝負」というこの劇団のお芝居に出演したことである。稽古場をのぞかせていただき、脚本・演出の待山さんにお会いし、危険運転致死傷罪と、強制性交等致死傷罪の二つの作品のお稽古をみせていただいた。

そして本番は、先ほどの殺人罪。待山さんは脚本では佐藤佐吉賞「最優秀脚本賞」をはじめ数々の賞をおとりになっているとこのことで、なるほど法曹の目から見ても立派な作品と感嘆した次第である。

私たち弁護士会も関与した司法制度改革、刑事手続きでは裁判員裁判が実現した。国民の司法参加が今後も主権者国民の間に定着して行くこと、そんなことにも役立ちそうな、観客参加型のお芝居として十分に楽しませていただいた。

次は、観客の裁判員でなく、情状証人役や贈収賄の被告人役等をやってみたいものである。しかし妻からはきつく止められている。

あみれ・ひまわり 2年間のあゆみ

《愛好会2年間の活動》

東京弁護士会宝塚歌劇愛好会は、2015年9月1日12名で発足しました。昨年の1周年の記事でもご紹介しましたが、9月1日は、90年前に日本で始めてレビュー「モン・パリーわが巴里よー」が上演された「レビュー記念日」です。

さて、創立から2年、会員は60名を数え、2017年の1年間の9公演で計12回の観劇会を開催することができました。現在は、ほぼ毎月の観劇会が定例となりましたが、これも会員の宝塚を愛する気持ちのおかげと感謝しています。

また、東京弁護士会の全会員を対象とする厚生委員会企画の一環である観劇会に協力しています。2017年は、星組「スカーレット ピンパーネル」と宙組「神々の土地」で計二回、愛好会の観劇日と同一日時で行いました。

また、活動の広がりの一つに、東京弁護士会の内外の団体の観劇会開催への協力があります。2017年には、日弁連副会長のみなさんの観劇会と食事会、第一東京弁護士会全期会の観劇会企画への協力を行いました。今後の予定として、2018年前半には、東京弁護士会内の団体である、親和全期会、期成会若手の会の観劇会企画が準備されています。

役員会を毎月一回開催し、企画の決定とその準備などの活動を行っています。



東京弁護士会の団体公認証

このような活動の積み重ねの活動により、2017年度には、囲碁、将棋、ゴルフの同好会に続いて、東京弁護士会の4番目の同好会として公認されました。

《2周年記念パーティー》

さて、2017年9月2日、愛好会2周年パーティーを、東京丸の内のKITTE「アルカナ」で開催しました。会員とその同伴者のほか、宝塚のOGさんをご招待し、記念撮影、食事会、会員とOGさんのトークなどで盛り上がりしました。

ご招待のOGさんは1周年に引き続いてご参加くださった第一次ベルばらブームの大スター汀夏子さんをはじめ、退団



2周年役員会の打ち上げ

間もない宙組娘役トップスター実咲凜音さん、元花組娘役トップスターの蘭乃はなさん、元宙組男役スター悠未ひろさんらを含む13名の方々が参加してくださいました。

各テーブルでの懇談の一段落後、OGさんがそれぞれにマイクの前に立ち、汀さんと私のトークに参加されこれからの舞台の出演予定など、楽しい話題を披露してくださいました。

《OG賛助会員について》

この2周年行事を機に、愛好会のOG賛助会員制度の充実ははかりました。宝塚歌劇団では、毎年40名～50名が新たに舞台に立つと共に、ほぼ同数の方々が退団されていきます。退団後も芸能活動を続ける方もいますが、歌・ダンス・舞踊などの技能を生かして、振り付けやダンス教室などの指導者として活動される方、結婚や大学進学、全く新たな分野での就職など、様々です。愛好会では、タカラジェンヌのみなさんを現役時代だけでなく、退団してOGとなった後も応援したい、という想いから、在団中より親交のあったOGの方々に「OG賛助会員」として会に登録していただき、愛好会の企画や、舞台公演・テレビ出演などの案内を愛好会会員に告知するなどの応援活動を行っています。

現在までに、汀夏子さん、旺なつきさん、紫ともさん、蘭乃はなさん、悠未ひろさんをはじめ17名の方の快諾をいただきOG賛助会員に登録していただいております。

OGの方々から、愛好会のこのような企画が、OGさん同士の久々の交流の機会となってよかったと感謝の言葉をいただきました。

今後とも、OGの方々の支援を含めて愛好会の活動が、OGさん、現役の生徒さん、宝塚に関係する多くの人々、愛好会の会員、そしてその家族、友人、知人、宝塚を支える大きな輪が広がれば、それに優る喜びはありません。今後とも愛好会へのご協力をよろしくお願いします。

東京弁護士会宝塚歌劇愛好会
会長 シゲニー・イトン

女性演出家の活躍

☆2017記憶に残る作品☆

「宝塚は女性だけの劇団」、これは演者の話であって実は演出家には男性が多い。宝塚大劇場で初めて上演された女性演出家の作品は、1999年に植田景子氏が手がけた花組「一夢と孤独の果てにールートヴィヒⅡ世」である。それから20年弱、昨今は女性演出家の活躍が著しい。これは宝塚103年の歴史の中でも21世紀初頭の重大トピックではないかと思う。昨年筆者が観劇した中で特に印象に残っている作品は、雪組の「幕末太陽傳」（小柳奈穂子 脚本・演出）、宙組の「神々の土地」（上田久美子 作・演出）、花組の「ハンナのお花屋さん-Hanna's Florist-」（植田景子 作・演出）と、いずれも女性演出家の作品であった。

「幕末太陽傳」 （小柳奈穂子 脚本・演出）

雪組前トップコンビ早霧せいなと咲妃みゆの退団公演。川島雄三監督の代表作である同名の映画の初のミュージカル化である。「居残り左平次」をメインにいくつかの古典落語のエピソードで構成されたコミカルな作品。宝塚それもトップコンビの退団公演で上演されると知ったときには意表を突かれた気がしたが、一方で小柳作品なら間違いないと期待に胸がはずんだ。トップコンビはもちろんのこと舞台の隅から隅までじっくり観てMyツボを発見して楽しめる作品であった。

「神々の土地」 （上田久美子 作・演出）

こちらは宙組トップスター朝夏まなとの退団公演だった。朝夏が演じるのはドミトリー・パブロヴィチ・ロマノフ。ロシア最後の皇帝ニコライ2世の従兄弟でラスプーチン暗殺の実行者として知られている人物だ。朝夏は陽の雰囲気溢れるスターだが、だからこそ余計にほんの少しだけ陰を感じる役を演じてその魅力が際立つ。丁寧に描かれた史実を横

糸と美しい架空の物語を縦糸にして織られた繊細な図柄のタペストリーのような作品であった。

「ハンナのお花屋さん-Hanna's Florist-」 （植田景子 作・演出）

花組トップコンビの明日海りおと仙名彩世を中心とする花組の選抜メンバーにより赤坂ACTシアターで上演された。舞台は2014年のロンドン。明日海が演じるのは高級住宅街の一角で花屋を営むデンマーク人のフラワーアーティストである。移民、地雷などの重たくなりがちなテーマを等身大の主人公の目線から描いている。親子間の葛藤、職場の人間関係など、自分と同じようなことで悩みながらも懸命に生きる登場人物たちに「私もがんばろう」と元気をもらえるような作品であった。

宝塚歌劇団には現在4名の女性演出家（上記3名のほか、檜畑亜依子）が在籍している。2018年！彼女達のますますの活躍が楽しみである。

東京弁護士会宝塚歌劇愛好会
副会長 きなもん（木南麻浦）

永遠の松五郎の

「むら遠征記」

2017年8月

去る8月4日、5日に、シゲニー・イートン先生をはじめとする東京弁護士会宝塚歌劇愛好会メンバーとご一緒に「むら遠征」に参加させていただきました。「むら」とは、103年の伝統を誇る宝塚歌劇のメッカ、宝塚大劇場のことです。

1日目は、梅田芸術劇場で、星組の「オーム・シャンティ・オーム-恋する輪廻-」（脚本・演出／小柳奈穂子）を観劇しました。宝塚では珍しいインドを舞台にした作品で、トップコンビの紅ゆずるさん、綺咲愛里さんをはじめとする星組の選抜メンバーが出演しました。主人公が輪廻転生するという奇想天外なお話で、時を超えても変わらぬ愛が明るく楽しく描かれていました。特に、インド映画もびっくりの豪華絢爛なショー場面は、見ているだけでハッピーな気分になりました。

2日目は、宝塚大劇場で、月組の「All for One ～ダルトニアンと太陽王～」（脚本・演出／小池修一郎）を観劇しました。こちらは、宝塚ではお馴染みのフランスを舞台とした三銃士を下敷きにされた作品でした。太陽王ルイ14世が実は女性だったというこれまた奇想天外な設定で、



梅田芸術劇場前で

珠城りょうさん演じるダルトニアンと愛希れいかさん演じるルイ14世の恋模様と並行して、銃士隊の活躍がとにかく格好良く描かれたスカッと作品でした。

前年に引き続き、福岡から単独で関西に乗り込みましたが、シゲニー先生をはじめとする皆様と共に、本拠地宝塚の地で、宝塚歌劇にどっぷりと漬かった2日間を過ごせたことは何より幸せな時間でした。

東京弁護士会宝塚歌劇愛好会準会員（福岡県弁護士会）
永遠の松五郎（永松裕幹）

Aug. 南紀白浜

26

2015年の東京三会、大阪、愛知の各弁護士会
執行部のみなさんと、南紀白浜に旅行しました。



円月島



アドベンチャーワールドのパンダ

Sept. 第20回
日弁連業務改革シンポジウム

09

東京大学本郷キャンパスで開催され、
私は三会実行委員会委員長を務めました。



開会の挨拶



樽開き



懇親会・マグロ解体ショー



実行委員会中心メンバーと事務局の
慰労会

Nov. 春秋会会員委員会研修会
「一人事務所から始めて」

22

独立の際の留意点、経費共同事務所と収入共同事務
所の差異など、質問にも答えながらお話ししました。



研修会の様子

シゲニー・イトンの
推薦図書 & 出版記念パーティ

「神の手」を持つ医師は、
稀代のはみ出し者だった。

私の医学部時代の友人の著書
を紹介します。

彼は、NHKの「プロフェッショナル
仕事の流儀」で紹介された、大
腸内視鏡検査・治療のプロです。
陥凹型がんを早期発見して早期治
療することこそが大腸がんを撲滅
することになると、それまでの学会
の常識に挑戦し、そしてその治療
を実践してきました。



工藤進英さん(左)と私

彼は、通常20分はかかると言われる検査と治療を平均3分で正確
に実行します。陥凹型はそもそも見えにくいようなのですが、私は彼の
の研ぎ澄まされた集中力と常人を超えた独特の能力、例えばプロの
囲碁棋士には、盤面に黒石と白石を10個ずつおいた状況が瞬時に
判断できるような能力があるように、何か消化器の内壁を観察した
ときに極めて微少な凹凸が瞬時に判断できるような特殊な才能が
あるのではないかと思います。

こんな彼は、世界を飛び回り、60カ国以上の大学や学会、病院で
講義や指導を行い、医師を育てる活動もしています。

数多くの医学の論文を海外を含めて発表している彼が、全く別のジ
ャナルの人生の生き方について書いた本を幻冬舎から出版しました。

先日行われた彼の出版記念パーティには私も駆けつけ、挨拶をさ
せていただきました

彼の人生は、大樹に寄らず、自身の考えを一本道で貫くというところ
から生まれています。タイトルに逆境とありますが、第三者から観
れば逆境と見える状況を、彼自身は逆境と感ずることもなく乗り切
ってきたと思います。

そんなことで、この本の191~192ページに、学生運動に没頭した
同級生が医学部から法学部に入り直し、弁護士になったことが書か
れていますが、友人として私のことに触れてくれたことを感謝してい
ます。

出版記念パーティで、私の挨拶中に、彼が急に壇上に上がり、私
のことを改めて出席者のみなさんにご紹介してくれました。

彼の本の中に出てくる彼の四つの言葉を、弁護士である私に置き
換えてここに記して結びとしたいと思います。

- ①「医療とは患者さんのために存在する」
「弁護士業務は依頼者のために存在する」
- ②「世界一の医療を提供する」
「日本一の弁護士業務を提供する」
- ③「患者さんに驚きと感動を与える」
「依頼者に驚きと感動を与える」
- ④「笑顔をモットーとする」(これは、医師と弁護士共通です)



逆境の中で
咲く花は美しい

昭和大学医学部特任教授
横浜市北部病院消化器センター長
工藤進英 著

幻冬舎 定価：本体1200円+税

1980-1982 「山本忠義法律事務所」「山本・泉法律事務所」時代 「仕事の主要な柱は人の繋がりから生まれたもの」

山本忠義法律事務所～
山本・泉法律事務所

伊藤茂昭法律事務所

伊藤・松田法律事務所

東京シティ法律事務所

シティユウワ法律事務所

私は、1980(昭和55)年に弁護士登録し、三年間、「山本忠義法律事務所」～「山本・泉法律事務所」にお世話になりました。山本忠義先生は、私の事務所在籍中に日本弁護士連合会の会長に就任され、事務所を守る泉信吾先生を入れた事務所名となりました。

泉信吾先生は、新潟県立高田高校の先輩であるとともに、私の兄雅治の同級生です。泉先生は高校時代、私の家にも遊びに来ましたので、まだ小学生だった私をはじめ、兄弟4人とも親交があり、私のことを実の弟のようにかわいがってくれました。山本忠義事務所に入ったのも泉先生の縁ですし、私が、その後弁護士会の活動に積極的に参加するようになったのも、山本先生、泉先生の縁です。

また、私は学生運動を経験したことから、事件をやることを通して、または事件と離れても、弁護士会活動や、社会的に意義のある活動をしたと考えていましたが、事務所は全く自由な雰囲気、何の束縛もなく、自由にさせていただきました。こんな雰囲気の事務所、事件処理も自由にやらせてもらったことが、今日の私の弁護士魂の礎となったと思っています。

事務所は、西新宿の京王デパートの真向かいにありました。入所決定後、泉先生にちょっと京王へ行こうと連れられて、そこでオーダーメイドのかなり高級な生地ですーツを仕立ててもらおうというプレゼントをいただいたことを今でも覚えています。

事務所は、山本先生、泉先生、寺島秀昭先生と4名でしたが、いつも一緒に食事をしたり飲みに行ったりしていました。先輩と

一緒ですと、すべて先輩が持つという風習で、銀座のクラブや新宿の料理店など、かなりの無銭飲食の恩恵に浴しました。

今は、弁護士の世界でも、こんな風習は薄れて来たのですが、私はこの恩返しは少しでも後輩のためにという思いでやっています。事務所はずいぶんと大きくなりましたので同じようには行きませんが、事務所に入所した新人弁護士、私の事件を担当している若手弁護士、あるいは弁護士会で活動している後輩たちへ、その恩返しという意味で、時々食事会など開催するようにしています。

もし、この読者の中に、私の食事会で恩恵に浴した人がいたならば、泉先生にも感謝していただければ幸いです。

この勤務弁護士時代に、いくつかの顧問会社がありました。その一つに財閥系の不動産会社がありますが、その出発点は高校の同級生の紹介から始まったものでした。

そのような訳で、弁護士としての出発点も、この後独立する訳ですが、その仕事の主要な柱も、もとを正せば、高校の先輩・同輩・後輩という人の繋がりから生まれたものでした。

今改めて、山本事務所の先輩、そして「弁護士になりました」という高校の同級生に送った一通の挨拶状から復活した高校時代の仲間たちとの交流に感謝しています。

今回は「伊藤茂昭法律事務所」時代です。



〈弁護士 伊藤茂昭の主要取扱分野〉

不動産取引・建築紛争・借地借家・会社法関係・相続・遺言

Tel:03-6212-5503(直通・秘書)

Mobile:090-1547-4357

e-mail:shigeaki.ito@city-yuwa.com

〈白い雲Weblog〉URL:www.shiroikumo.jp



シティユウワ法律事務所

〒100-0005

東京都千代田区丸の内2-2-2 丸の内三井ビル(受付7F)

Tel:03-6212-5500(代表) Fax:03-6212-5700

URL:www.city-yuwa.com



編集後記：『白い雲』は、伊藤茂昭法律事務所の開設と同時に創刊し、今年で35年目に入ります。当初はB5判でミニコミ誌のような内容でした。誌面には多くの知人・友人の方にも登場あるいは寄稿していただきました。今回、愛好会の若手弁護士のお二方に記事をお願いしました。再び、伊藤茂昭に関係してくださっている多くの方を繋ぐ冊子となれば、と思っています。また、事務所の歴史も、回を分けて振り返ってまいります。今後ご愛顧のほどよろしくお願い致します。

編集人 伊藤真理子

季刊「白い雲」通刊64号 2018年1月発行

発行人：伊藤茂昭

編集人：伊藤真理子

制作：株式会社創林社

印刷：神谷印刷株式会社